

【研究ノート】

大東文化学院草創期の日本史教育について

宮瀧 交二

はじめに

平成30(2018)年4月、大東文化大学文学部に歴史文化学科が設置されることになった。大正12(1923)年9月20日の私立専門学校・大東文化学院の設置認可から95年、ほぼ1世紀を費やして準備された待望の歴史学科の設置である。これまで本学では、全学共通科目(いわゆる他大学で言うところの教養科目)等を通じて全学生に対して日本史教育を実施してきたが、今後、歴史文化学科においては、2年次から日本史コースを選択する学生を対象に、より本格的な日本史教育がスタートする予定である。

一般に私学には、その設立以来の伝統的な教育方針・スタイル等が存在し(「建学の精神」などと呼ばれる)、同時にこれが教育の伝統として長く将来にわたって尊重されるべきものと認識されていることが多い。従って、本学における日本史教育についても、この機会にこれまでの歩みを概観し、本学における日本史教育の伝統を確認しておくことも重要であると考えたのが小稿執筆の動機である。今回は、設置認可の翌年である大正13(1924)年1月に、東京市麹町区富士見町6丁目16番地の「九段校舎」で第1回入学式が行われて以来、昭和16(1941)年2月に「池袋校舎」に移転するまでの「九段時代」を対象に、大東文化学院草創期の日本史教育について確認しておくことにしたい。

1 大東文化学院設立時の学科課程と日本史教育

大東文化学院設立時の「大東文化学院学則」には、次のような学科課程が定められていた¹。

第1表 大東文化学院設立時の学科課程

参考科目	作詩作文	支那語学	文學	史學	經學及 子學		皇學	正科目	科目 科別 學年	
					子學	經學			第一學年	第二學年
解字解題 法學概論 心理學									第一學年	本科
五	一	一	五	五	三	六	三	二四	一週 時數	
解字解題 經濟學概論 教育學									第二學年	
五	一	一	五	五	三	六	三	二四	一週 時數	
解字解題 西洋哲學概論 東洋文學史									第三學年	高等科
五	一	一	四	五	三	六	三	二三	一週 時數	
解字解題 東洋美術史 東洋哲學概論									第一學年	
五	一	六	四	三	二	六	二	二四	一週 時數	
解字解題 金石學 東洋美術史									第二學年	高等科
三	一	六	四	三	二	六	二	二四	一週 時數	

これによれば、1週につき24時限あった正科目の一つに位置付けられていた「史学」には、3年課程であった本科においては1週につき5時限、2年課程であった高等科においては1週につき3時限が配当されていた。これを実際の授業で見ると、大正14(1925)年度の本科及び高等科の学科課程とその担当者は以下のとおりである(本科第3学年生は未だ存在しない)²。

本科第1学年

詔勅衍義	教授・法博	平沼淑郎
神皇正統記	教授	佐藤仁之助
弘道館記述義	教授	加藤虎之亮
孝経・大学	教授	牧野謙次郎
日本外史	助教授	松本洪
	助教授	那智佐典
靖献遺言	助教授	川田瑞穂
十八史略	教授	池田四郎次郎
文章軌範	教授	細田謙藏
唐詩選	教授	松平康国
作文	講師	館森万平
作詩	嘱託	岡崎壮太郎
復文	助教授	松本洪
支那語	教授	木野村政徳
	講師	渡俊治
倫理	教授	岩橋遵成
法学概論	教授・法博	中村進午
習字	講師	高塚錠二
教練	陸軍歩兵少佐	小山薫雄
擊劍		中山博道

本科第2学年

明倫和歌集

論語

小学

韓非子

太平記

日本政記

十八史略

八家文読本

古今集

三体詩

作文

作詩

支那語

論理・心理

経済学

維新史

習字

教練

擊劍

教授

教授

教授

教授

教授

助教授

助教授

教授

教授

助教授

講師

教授

嘱託

教授

講師

教授

教授

助教授

講師

陸軍歩兵少佐

佐藤仁之助

内田周平

加藤虎之亮

安井小太郎

今井彦三郎

那智佐典

松本洪

細田謙藏

佐藤仁之助

川田瑞穂

館森万平

国分高胤

岡崎壮太郎

木野村政徳

渡俊治

北吟吉

平沼淑郎

川田瑞穂

高塚錠二

小山薫雄

中山博道

高等科第1学年

帝国憲法

詔勅衍義

万葉集

詩經

教授・法博

教授・文博

教授

教授

清水澄

松本愛重

今井彦三郎

安井小太郎

書經	教授	松平康国
論語	教授	牧野謙次郎
孟子	教授	川合孝太郎
春秋左氏伝	教授	川合孝太郎
荀子	教授	島田鈞一
史記	教授	池田四郎次郎
語朝詩別裁	教授	松平康国
作詩	教授	国分高胤
東洋哲学	教授・文博	井上哲次郎
東西思想比較	教授・文博	服部宇之吉
支那語(随意)	教授	木野村政徳

高等科第2学年

日本書紀	教授・文博	松本愛重
書經	教授	松平康国
礼記	教授	川合孝太郎
論語	教授	牧野謙次郎
大学・中庸	教授	内田周平
近思録	教授	内田周平
伝習録	教授	牧野謙次郎
莊子	教授	安井小太郎
文選	教授	安井小太郎
淮南子	教授	安井小太郎
呂氏春秋	教授	安井小太郎
文章法	教授	松平康国
東洋思想史	教授・文博	井上哲次郎
作詩	教授	国分高胤
経済学概論	教授・法博	平沼淑郎

法律学原理
支那語(随意)

教授・法博
教授

鷗沢総明
木野村政徳

また、大正 15(1926)年度の本科第 3 学年及び高等科第 3 学年の学科課程とその担当者は以下のとおりである³。

本科第 3 学年

万葉集	講師	金子元臣
古事記	教授	植木直一郎
中庸	教授	平野彦次郎
書経	教授・文博	岡田正之
詩経	教授・文博	塩谷温
孟子	教授	飯島忠夫
春秋左氏伝	教授	諸橋轍次
荀子	教授	内野台嶺
史記	教授・文博	加藤繁
古詩評注	教授	平野彦次郎
清文評註読本	教授	近藤正治
論理学	教授・文博	吉田静致
支那語・詩文	講師	田中逸平
作詩	教授	前川三郎
教育学	助教授	見尾勝馬
英語	講師 英語ニッ	木村巖
教練	陸軍少佐	竹下幾太郎
剣道	師範	中山博道
弓道	教師	大槻豊

高等科第3学年

令義解	教授・文博	松本愛重
続日本紀・延喜式	教授・文博	松本愛重
周礼	教授・文博	市村瓚次郎
儀礼	教授・文博	服部宇之吉
易経	教授・文博	遠藤隆吉
説文	講師	樋口勇夫
老子	教授・文博	小柳司気太
墨子	教授・文博	小柳司気太
楚辞	教授	古城貞吉
礼記	教授	古城貞吉
五朝詩別裁集及作詩	講師・文学士	久保得二
作文	教授	滝川亀太郎
支那語	講師	田中逸平
西洋思想史	助教授・文博士	見尾勝馬
教育学及教授法	助教授・文博士	見尾勝馬
英語	講師 邦訳ニッ	木村巖
教練	教官陸軍少佐	竹下幾太郎
剣道	師範	中山博道
弓道	教師	大槻豊
金石学(課外)	講師・文学士	神田喜一郎

当該期の大東文化学院は、大正 15(1926)年に生じた紛擾事件により、昭和 3(1928)年末頃に至るまで、授業科目と担当教員が固定されない不安定な状況が続いていたようであり⁴、ここに掲げた授業科目と教員も、その一齣を示している。近年、浅沼薫奈氏は、当該期に実際に行われていた授業を、先の学科課程に照らして科目ごとに分類・整理したが、以下のとおりである⁵。

第2表 大東文化学院設立時の学科課程

	本 科					高 等 科							
	第1学年	1週時間	第2学年	1週時間	第3学年	1週時間	第1学年	1週時間	第2学年	1週時間	第3学年	1週時間	
正 科 日	皇学	皇統新義 西昆堂 神皇正統記 弘道船記述義 新論	5	帝國憲法 皇室典範 明倫和歌集	2	古事記 万葉集 職原抄 公事復原	4	日本書紀 万葉集	4	続日本紀 延喜式 令義解 法曹至要鈔	4	大日本史志類	2
	經学 及 子学	孝經 大学 小学	3	中庸 論語 韓非子	8	詩經 書經 孟子 春秋左氏傳 荀子	12	書經 詩經 春秋左氏傳 近思錄 傳習錄	12	四礼 礼記 管子 呂氏春秋 淮南子 孫子	12	周易 儀礼 說文說字 老子 莊子 列子 墨子	17
	史学	国史略 日本外史 日本政記論文 十八史略	10	元明氏略 清史略 朝鮮通言 太平記	8	史略	4	前後漢書	2	通鑑綱目	2		
	文学	文章輯總 群詩選	3	古今集 唐宋八家 文談本 三体詩	4	明清文鈔 古詩選	3	古文群類纂 五朝詩別裁集	3	文選 五朝詩別裁集	3	詩評 古詩源	4
	作 詩 文												
	支那語	支那語	4	支那語	3	支那語	3	支那語	2	支那語	2	支那語	1
	参 考 科 目	法学概論 倫理法	4	経済学 論理学 心理学	4	西洋哲学 教育学	4	東洋哲学 西洋思想史 法律学原理	5	東洋思想史 社会学 法律学原理	5	東西思想比較	4
	武 科	劍道 弓道	4	劍道 弓道	4	劍道 弓道	4	劍道 弓道	4	劍道 弓道	4	劍道 弓	4
	科 外	国史眼 談史余論		日本文学史		支那文学史		音韻学		東洋美術史		金石学	

これによれば、大東文化学院の「史学」は、本科では第1学年で「国史略」「日本外史」「日本政記論文」「十八史略」、同第2学年で「元明史

略」「清史略」「靖献遺言」「太平記」、同第三学年で「史略」を学び、高等科では第1学年で「前後漢書」、同第2学年で「通鑑綱目」を学んでいたようである。このうち、日本史の授業に用いられた教科書は、言うまでもなく『国史略』、『日本外史』、『日本政記』、『太平記』の四書であろう。それぞれの概要は以下のとおりである。

『国史略』は、文政9(1826)年に儒学者である巖垣松苗[安永3(1774)年～嘉永2(1849)年]が編んだ漢文編年体の歴史書であり、神代から天正16(1588)年の後陽成天皇の聚楽第行幸までを記したものである。

『日本外史』は、文政10(1826)年に儒学者である頼山陽[安永9(1780)年～天保3(1832)年]が編んだ漢文体の歴史書であり、源平両氏から徳川氏に至るまでの13氏の武家の興亡を大義名分論の立場から記したものである。

『日本政記』も、頼山陽が編んだ漢文編年体の歴史書であり、山陽の死後である弘化2(1845)年に刊行された。神武天皇から後陽成天皇までを扱っている。

『太平記』は、14世紀後半に成立した作者未詳の軍記物語で、鎌倉幕府滅亡と南北両朝の争乱を和漢混交文で記している。

草創期の大東文化学院では、これらの歴史書を教科書とし、まさしく近世の藩校と見紛うばかりの日本史教育が行われていたのである。

ちなみに、今日では日本史研究の基本史料となっている『古事記』『日本書紀』『続日本紀』等の史料が、「史学」ではなく「皇学」の科目に配当されていることも注目される。既に大東文化学院創設時における学科課程の特徴・特殊性として、①外国語、特に英語の履修がなかったこと、②「漢学」を中心としたカリキュラム編成が組まれていたこと、③「皇学」という特殊な用語による表現が採用されたこと、が指摘されているが⁶、この「皇学」という新たな学問領域に対する教職員の認識の相違が、前掲の紛擾事件につながったともみられている⁷。

2 明治～大正期の日本史教育

前章において、草創期の大東文化学院では、『国史略』、『日本外史』、『日本政記』、『太平記』等を教科書として、近世の藩校と同様の日本史教育が行われていたことを確認したが、これを同時代の一般的な教育機関における日本史教育と比較しておきたい。

海後宗臣の整理に従えば、明治5(1872)年に、フランスの制度に倣って学制が公布されたが⁸、同年、学制の条文に記された多くの科目を教授するにあたっての細則である「小学教則」も公布され、そこには、8年制の小学校において、第7級すなわち第5学年後期から第1級すなわち第8学年後期までの4学年にわたって「史学輪講」という科目が掲げられている。「史学輪講」は、第7・6・4級では1週4時間、第5級では1週6時間、第3・2・1級では1週2時間と規定されており、それぞれの教材も指示されている。第7級は『王代一覽』、第6・5級は『国史略』、第4級は『万国史略』、第3・2・1級は『五州記事』であった。このうち、『王代一覽』と『国史略』は日本史教科書であるが、近世以来の漢文の歴史書がそのまま利用されたことになる。その一方で、文部省は新たに独自の歴史教科書の編集・発行を試みており、これが下級用の『史略』[明治5(1872)年刊]と上級用の『万国史略』[明治7(1874)年刊]・『日本略史』[明治8(1875)年刊]であった。いずれも漢文ではなく、カタカナ混じりの文語体で執筆されており、ようやくここにおいて漢文による日本史教育と決別したのであった。

明治14(1881)年、政府は小学校教則綱領を定めて、「歴史」の教科書にあっては、従来までのような歴代天皇史形式を廃し、事件の歴史的意義の大きさによって記述の分量を按分しながら概ね事件の終始を年代順に記述する紀事本末体を採用することが定められた。このことにより、全国の小学校は次第に先に掲げた文部省刊行の教科書(『史略』『万国史略』『日本略史』)から離れて、民間が編集した日本史教科書を使用するようになった⁹。

更に、明治19(1886)年に公布された小学校令により高等小学校の教科に「歴史」が加わり、中学校令により尋常中学校でも「歴史」が教えられることになった。その後は、政府の度重なる学制制度の改革により、小学校教科書には検定制度が導入され、様々な歴史教科書が使用されることになるが、その詳細については紙幅の関係から割愛せざるを得ない。しかしながら、近世以来の漢文の歴史書が再び日本史教科書として使用されるようなことだけは無かったのである。

また、村山吉廣氏が指摘するように、明治27(1894)年に始まった日清戦争の勝利は、中国を蔑視する社会的風潮をもたらしていた。例えば、それまで新聞・雑誌上で圧倒的な支持を得ていた「漢詩欄」も、この日清戦争を契機に急速に衰退・廃止の道を歩んだようである。村山氏の言を借りれば、「大正・昭和の漢学はこのため、明治漢学の余波であり、往年の勢はみられな」かったのである¹⁰。

このように、近世以来の漢文教育が衰退し、また、日清戦争を契機とする「漢学離れ」が進んだ大正12(1923)年に、こうした状況を危惧する人々の手によって、私立専門学校・大東文化学院の設置が認可されたのであった。

3 「日本外史」の二つの効用

草創期の大東文化学院が日本史教科書として用いていた『国史略』、『日本外史』、『日本政記』、『太平記』といった歴史書の中で、特に注目しておきたいのが「発行部数は三十万とも四十万とも言われ」、「幕末明治期の大ベストセラー」であった頼山陽の『日本外史』である¹¹。先述のように、『日本外史』は、源平両氏から徳川氏に至るまでの13氏の武家の興亡を大義名分論の立場から記した漢文体の歴史書であり、山陽が20余年を費やして完成させた大著であった。その大義名分論が、幕末の尊王攘夷運動に大きな影響を与えたことは広く知られているところであるが、意外にも版本として広く流通したのは山陽の死後のことで

あった。齋藤希史氏によれば、『日本外史』が幕末維新时期に人気を博したのは、その大義名分論が時代にマッチしたばかりではなく、本書が「わかりやすい漢文」と「朗読しやすい漢文」で執筆されていることも、その理由の一つであるという¹²。おそらく、大東文化学院で学ぶ学生たちは、入学後、本書を日本史学習の教科書として用いる以前に、幼少時から漢文学習の教科書として本書の素読を行うなどしていた者も多かったのではないだろうか¹³。

前章でも述べたように、大東文化学院が設置された大正末期は、日本史教育という面からすれば、文部省が推進する学制改革に伴って、新たな日本史教科書が多数誕生している時期であった。それにもかかわらず、大東文化学院が日本史教育の教科書として『日本外史』を敢えて用いたのは、本書が日本史学習に際して最もよく知られた歴史書であったことはもとより、漢文学習の教科書としても秀逸であったためと思われる。

まとめにかえて

小稿でこれまで述べてきたように、近世以来の漢文教育が衰退し、また、日清戦争を契機とする「漢学離れ」が進んだ大正 12(1923)年に、こうした状況を危惧する人々の手によって、漢学の振興を図ることを目的として私立専門学校・大東文化学院の設置が認可されたのであった。そのような大東文化学院が、小学校をはじめとする他の教育機関と同じような日本史教科書を用いず、『日本外史』をはじめとした歴史書を教科書として、まさしく近世の藩校と見紛うばかりの日本史教育を行ったのも、得心のいくところである。ただし、話は「漢学の振興＝『日本外史』の教科書採用」といった構造に単純化してしまってはならないであろう。ここで言う「漢学」、すなわち大東文化学院の「漢学」とは、大正 12(1923)年 9 月に大東文化協会が財団法人大東文化協会に改組されるに際して示された「寄附行為」に、

「我皇道ニ遵ヒ及国体ニ醇化セル儒教ニ拠リ国民道義のノ扶植ヲ図ルコト」(第二章第二條一項)

とあるように、「我皇道ニ遵ヒ及国体ニ醇化セル儒教」であり¹⁴、また、大正 13(1924)年 1 月 11 日に行われた一期生入学式にあたる第一回始業式における初代総長・平沼騏一郎の訓辞にある「皇道及国体ニ醇化シタ儒教」であったのである¹⁵。従って、徳を以て治める王者は、力をもって支配する覇者に勝るという大義名分論からなる尊王思想を構築・提唱した水戸学の流れを汲む頼山陽の『日本外史』が大東文化学院の日本史教科書として用いられた背景には、前掲のような理由はもとより、明治時代に始まる近代天皇制の形成・発展過程における「皇道及国体ニ醇化シタ儒教」としての「漢学」に相応しい教科書の採用という観点が存在したのである。

なお、今回は、大東文化学院草創期のカリキュラム編成を概観するのみに終わってしまったが、頼山陽をはじめとするこの時に採用した各種教科書の著者や、これらの教科書を用いて大東文化学院で実際に授業を担当した前掲の各教員が立脚する学問的系譜や師弟関係(例えば前掲の水戸学など)を、より系統的に整理・分析し、理解することなく、当該期の大東文化学院の教育を理解することは不可能であることにも気付かされた。しかしながら、これは最早、現在の筆者の能力を大幅に超えてしまっているので、他日を期すものとしたい。

また、小稿をここまで書き進めてきて気になるのは、前掲の大正 14(1925)年度の本科第 2 学年の授業科目の中に登場する助教授・川田瑞穂[明治 12(1879)年～昭和 26(1951)年]による「維新史」の授業である。川田は、高知県出身の漢学者であり、後に早稲田大学高等師範部教授、無窮会会長事務代行・理事、東洋文化学会評議員・幹事、東洋文化研究所学監・所長代理等を歴任した人物であるが、この「維新史」がどのような内容の授業であったのかを解明することは、当該期の大東文化学院における日本史教育を考える上で極めて重要な作業となる。残念

ながら、現時点ではこれ以上の検討材料を持たないため、その解明作業については他日を期すものとしたい。

最後になったが、小稿の執筆に際しては、本学の小林敏男名誉教授、荒井明夫教授、久住真也准教授から、数多くの貴重な御教示を頂戴した。記して感謝申し上げたい。

¹ 「(2)大東文化学院学則」(尾花清編著『大東文化学院創立過程基本史料』大東文化大学人文科学研究所、2005年。原史料は東京都公文書館所蔵)

² 「第二編 第一章 九段時代」大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会『大東文化大学五十年史』学校法人大東文化学園、1973年。

³ 前掲註²に同じ。

⁴ 浅沼薫奈「井上哲次郎と大東文化学院紛擾－漢学者養成機関における「皇学」論をめぐる－」『東京大学史紀要』27、2009年。

⁵ 前掲註⁴に同じ。

⁶ 大東文化歴史資料館(大東アーカイブス)『大東文化大学の歩んできた道』学校法人大東文化学園、2013年。

⁷ 前掲註⁶に同じ。

⁸ 海後宗臣『歴史教育の歴史』東京大学出版会、1969年。こうした、明治5(1872)年の学制はフランスの制度を採用したものであるという見解は、現在でも高等学校の歴史教科書に一般的なものである(例えば、『詳説日本史』[山川出版社、2012年]など)。しかしながら近年では、この当時、フランスには中学区や小学区が存在せず、また、学区の重層構造はアメリカにもモデルが見あたらなかったことから、明治5(1872)年の学制に見られる学区制は、日本の起草担当者が独自に考案・採用したものではないかという見解も提出されており(竹中暉雄『明治五年「学制」－通説の再検討－』ナカニシヤ出版、2013年)、今後の研究の進展が俟たれるところである。

⁹ 前掲註⁸に同じ。

¹⁰ 村山吉廣「大正・昭和の漢学－孤軍奮闘する作家たち」『漢学者はいかに生きたか(近代日本と漢学)』大修館書店、1999年。

¹¹ 齋藤希史『漢文脈と近代日本』角川文庫、2014年。

¹² 前掲註¹¹に同じ。

¹³ 尾藤正英も、『日本外史』が広く愛読された理由として、①文章が優れていること、②山陽の文章が当時の文人の水準からすれば平明であり、多数の読者に理解され易い性格であること、③内容が親しみやすいこと等を掲げている(尾藤正英「解説」『日本外史(上)』岩波文庫、1976年)。

¹⁴ 前掲註⁶に同じ。

¹⁵ 前掲註⁶に同じ。

Japanese History Education at Daito Bunka Gakuin in the Beginning of Its Establishment

Koji Miyataki

Now that nearly ninety-five years have passed since Daito Bunka Gakuin was established in 1923, it is of importance to clarify how instructors taught Japanese history at the time of the school's establishment. The present study reveals that although the Western-style education system was introduced and new textbooks on Japanese history were prepared by the Ministry of Education in the Meiji era, those textbooks were not used in Daito Bunka Gakuin. Since Daito Bunka Gakuin aimed to advance the study of Chinese classics, the school adopted the textbook that was widely used in clan schools in the latter period of the Edo era, namely *Nihon Gaishi* (Unofficial History of Japan) written by the Confucian scholar Sanyo Rai (1789–1832).